

# 退職にあたって

専修大学人間科学部教授 山 上 精 次

1977年（昭和54年）4月に文学部人文学科心理学コースの専任講師として着任して以来、実に今年で40年超になります。馬齢を重ねているうちに、いつの間にか定年退職の日が目前となりました。40年という年月は、ありきたりな感想ですが長いようで短い。しかしその間、大小軽重苦楽明暗、実にいろいろなことがありました。

最近になって、それらのいろいろが突然、脳裏に浮かぶようになりました。浮かんだ内容によって、ニヤニヤしたり、眉間にシワが寄ったり、あるいはじわっと涙がにじんで来たりと文字通りいろいろです。しかし比率で言うと多くは悔悟・痛恨・反省・苦悩に属します。思わず「わあー」と声を上げたいような恥ずかしい記憶も少なくありません。このように過去記憶が脈絡なくポップアップすることは加齢に伴う自然で生理的な現象だと思います。老化に伴う身体機能と脳機能の衰退、多少の個人差はあるにしても、誰しもその下降的变化から逃れることはできません。私にその順番が回ってきたに過ぎないわけですが、しかし大学という職場には、学生をはじめとして若い人々が多数あふれています。それらの若い人たちに囲まれていると、気持ちだけはいつも何となく若い。私自身は大学にいと、20代後半の大学院生の頃の気分になっています。つまり、精神発達と成熟が20代後半で停滞しているということになります。たまに鏡に映った自分が目に入ったり、自らを内省した時に、そこに見える老いさらばえた人物が自分であることを覚知し愕然とします。その後しばらくは物理年齢にみあった正しい自己像認知が続きます。しかしそれもごく短時間のことです。若い人たちと交わると、あつという間に院生時代まで退行が起きます。まだらでランダムな過去記憶の侵入、それに加えて年齢認知のアップダウンによる自己像の漂動、これの繰り返しが日常となっています。この繰り返し自体はさほど苦になるわけではありません。人生はそうしたものだと思っています。むしろ若い人たちとの日々の交流はまことに心楽しく、私にとってはこの場で人生の大半を過ごさせて頂いたことは本当に身に余る幸福であったと思います。しかし、心理的成長が停滞した私は、回りの人々にとってはさぞかし迷惑な存在だったろうと思います。人間科学部の先生方、とりわけ心理学の先生方やスタッフのみなさん、学生・院生のみなさん、そして教務課を始めとする職員のみなさま方に、退職にあたって、いの一に申し上げたいのは、ほんとうにご迷惑をお掛けしました、申し訳ございませんでした、のお詫びの言葉です。

人生の大半を専修大学で働くという、身に余る幸せの機縁を与えて下さった先生方のうち、東京大学の八木晃先生、入職当時の専修大学心理学教室の重松毅先生、金城辰夫先生、高橋滯子先生、東條正城先生には感謝をしてもしきれないご恩があります。重松先生は、文学部創設の際に、生田の山に心理学の専門教育の旗を立てるといふ強い意志を以って心理学教室を創設されました。どのような心理学を学ぶにも実験心理学の基礎が必要であるという重松先生の教育理念は、現在の心理学科にも揺ぐことなく引き継がれています。金城先生は、重松先生とともに教室創立者のお一人で、学習心理学の泰斗として多くのご著書を残されています。私がまだ東大の院生であった頃、金城先生は夕方から本郷の動物実験室にお見えになって博士論文のための実験をなさっていました。先生が定年退職されるまで、20年以上の長きにわたって色々なことをお教え頂きました。しかしつい先日、先生が8月末にご逝去されたことのご連絡がご遺族から届き、余りのことに暫く身動きが取れないほど驚きました。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。高橋滯子先生は、学部生時代に実験演習で知覚実験のご指導を頂きました。先生は、他大学に先駆けて、本学で心理学史を専門科目として講ずることをお始めになりました。日本の心理学史研究は高橋先生なくして存在しなかったと言われておりますが、心理学研究室での先生との日々の会話でも、心理学史に対する先生の熱い思いを感じておりました。東條正城先生は、心理学教室創設以来

絶えることなく設置されていた脳波計を使ったご研究，教育をなさっていましたが，ご在職中に60歳にてご逝去されました。先生はお酒をこよなく愛されていて，しばしばご一緒させて頂きました。酔うほどに含蓄のある深い教育観，人生観をご披露いただきました。最後になりましたが，八木先生には，指導教官として学部，大学院を通してご指導頂きました。専修大学への就職をお勧め頂いたのも八木先生でした。その際，大学の専任教員としての心がけを厳しくご指導頂きました。大学に骨を埋める覚悟をもって務めること，大学の近くに住むことなどですが，私が専修大学に入職した半年後でしょうか，八木先生はわざわざ生田校舎においで頂き，指導教官として，重松先生に対して，私を採用して下さったことのお礼のご挨拶をなさってくださいました。いまでもその場面ははっきりとした映像で脳裏に焼き付いています。先生方，ほんとうにありがとうございました。

さて近年，わが国では大学のみならず教育全般に対する不当な社会的圧力が強まっているように見受けられます。ただ単に経験年数のみ長く，毎年，学生指導の結果について痛恨の思いを残し，反省点ばかりが蓄積している私などが偉そうなことを言えた義理ではないのですが，人が人を教えるということは本当に大難事。シラバスだのアクティブ・ラーニングだの何とかポリシーだの，聞いているとまるで教育にはクリアな正解，王道があったのかしらという思いに陥ります。しかし大学教育の対象はネズミではなく機械でもない。無限の遺伝的素質の多様性を持ち，生後経験の無限の多様性を持ち，高度の脳機能をそなえた「人間」です。教える側も同様に無限の多様性をもった生身の人間です。教える内容も無限の多様性を有します。正解や王道があつてたまるかと今は思いますが，私も若い頃はシンプル・ヘッドで心理学なら正しくヒトを形成できると信じていました。時代の思潮がそうだったとはいえ，恥ずかしくて耳朶が熱くなります。最近では，人が人を教えるには，最終的には対機説法的な方法に倣うしかないかもしれないと感じています。しかしこれも言うは易く行は難い。いま退職によって，教育というある種の業ごうから解放されること，教えるということに対する底知れない畏れと怖れから解放されることに一縷の安堵を感じていますが，私の残してきた業のごときの罪深さは消えません。残された時間でその償い方について考えていきたいと思っています。

2018年12月10日 記